雑学書庫 知識の記録

不満がなくてもやる気は生まれない：ハーズバーグの二要因理論

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/12406/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

給料が上がり、オフィスが快適になり、社内の規則も合理的に変わったのに、働く気になれないと言う人がいます。反対に、給料は変わらないのに仕事がおもしろくて時間がたつのを忘れる人もいます。満足の反対が不満なら、不満をなくすだけでやる気が出るはずですが、現実にはそう動かないことが多いのです。 このずれを一つの理論で説明したのがアメリカの心理学者フレデリック・ハーズバーグ（Frederick Herzberg）で、その理論が二要因理論（Herzberg's Two-Factor Theory）です。職務への満足をつくる要因と不満をつくる要因が、互いに別のまとまりだと見るのが核心で、動機づけ要因と衛生要因という二つの名前で広く知られています。 この記事では、ハーズバーグがこの理論をどのように導いたか、衛生要因と動機づけ要因はそれぞれ何か、そしてこの理論を職場で使うときに何に気をつけるべきかを順に見ていきます。 満足と不満を別々に見る目 面接から始まった理論 ハーズバーグは、仕事でいつ非常に満足し、いつ非常に不満だったかを直接たずねる方法で研究しました。対象はアメリカのピッツバーグ周辺のエンジニアと会計士203人で、当時の企業社会でこれらの職業の比重が高まっていたため選んだと伝えられています。回答者は気分がはっきり変わった出来事を、始まりと終わりのある話として語り、研究者はこれらの話をまとめて、